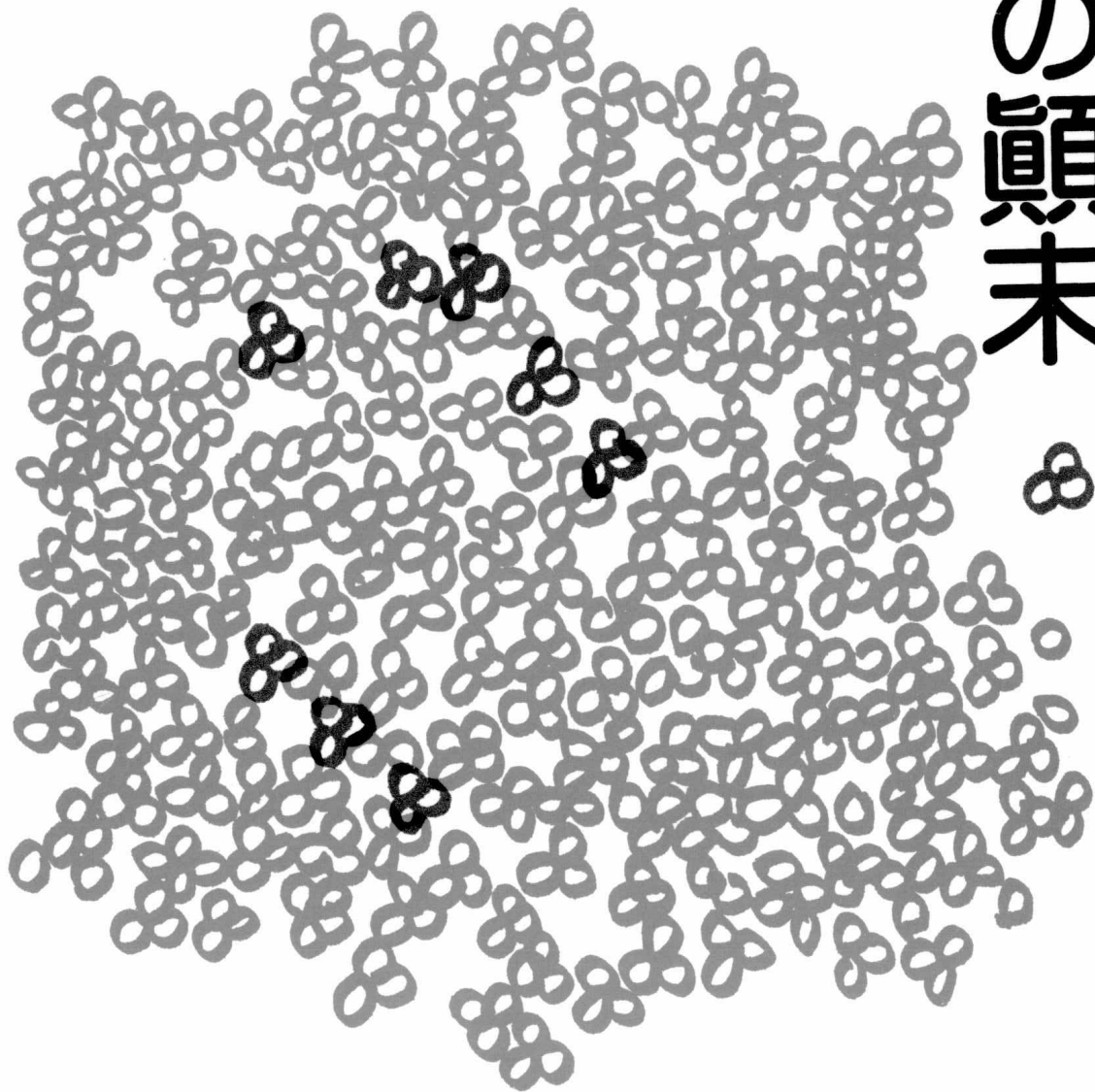


からすの顛末

伊藤幸也
詩集



すの顛末から



伊藤幸也
詩集

伊藤 幸也 略歴

1928年 宮城県加美郡小野田町に生れる
1948年 仙台工業専門学校土木科卒業
1951年 東北大学（旧制）経済学部卒業 仙台勤務
同 年 4 月 「時間」同人 以後平成 2 年（1990年） 7 月「時間」終刊まで同人として在籍
1956年12月 「方」創刊 藤一也、高澤喜一、今入惇などが主要メンバー 宮城県内の若手詩人24名を糾合（上京以降……）
1963年 6 月 創作誌「北斗」（木暮克彦編集）創刊に参加
1971年 5 月 北川冬彦賞（第 6 回）受賞
1973年11月 詩集『被災地』（時間社）
1974年 「セコイア」（木暮克彦編集・発行）創刊に参加
1981年10月 作品集『北の稲妻』（朋信社）
1988年11月 詩集『茫茫』（セコイア社）
1989年 6 月 「時間」創刊40周年につき、西山壽、高橋次夫、友枝力、村上泰三の編集スタッフと諸企画の実施
1990年 4 月 北川冬彦永眠（享年89歳10ヶ月）告別式において友枝力と共に司会担当
1990年 7 月 「時間」終刊
1991年 5 月～ 「竜骨」創刊 前記編集スタッフの協議で発行責任者となり今日に至る（「竜骨」第33号発行済）

からすの顛末

1999年 8 月 1 日 第一刷発行

著 者 伊藤 幸也

発行者 井口 哲夫

発行所 (有)鶴書院

東京都千代田区内神田3-22-3

郵便番号 101-0047

電話 03 (5294) 0112

発売所 (株)星雲社

東京都文京区大塚3-21-10

郵便番号 112-0012

電話03 (3947) 1021

©Y. Ito

1999

落丁・乱丁本はお取替え致します

ISBN4-7952-6799-5 C0092

からすの顛末

からすの顛末

目次

I

些事の痛み 10

歌声 12

風景 14

霞ヶ関寸描 16

ひまわり綺想 20

キナ臭いやつら 24

II

遊牧地にて 30

からすの顛末 34

熱帯夜 40

回想 42

妖氛 44

回帰 46

III

仮想現実

54

霜夜

58

望郷

60

戯画像

62

山峡

66

壮絶の美

68

目顔の光景

70

空耳

72

あとがき

77

略歴

81

からの顛末

装订·装画／塩谷良治

I

些^さ事^じの痛み

湯豆腐やいのちのはてのうすあかり

万太郎

元旦の朝 舞子ちゃんは

透명한日射しを

けんらんとまといながら

ちつとも目覚めようとしな

ふだんなら おちよぼ口で

快活にしゃべっているのに

—— 何だか 様子がおかしい

訝って ガラスの水槽をとんと叩いてみた

が 揺らめくみづくさの

薄らみどりの茂みにあつて 宙吊りのように

まるで動かない

縁側には

みづいろの澄んだ空から

白日がおっとり耀いて降りそそぐ

指で きつくつくと――

舞子ちゃんは

魚体というぬるりとした存在のあえかさを

つぶらな瞳に凍てつかせて

重りのとれた水中花さながら

白のおなかを

水面にさらけだした

歌 声

重くたれこめる空から雲が降りしきり、通勤時のたて込むプラットホームは
びしょ濡れになっていた。

乗車待ちの客たちは、洋傘のしずくで一様に肩を濡らし、コートの衿をたて
たりして、うそ寒く、浮かぬ表情であつた。なかには指先がかじかむのか、足
踏みしながら両手を頬にさすっている女学生の姿も見かけられた。

そんな慌ただししい一時のこと。向い側プラットホームの右手の一角から、突
如として、男性の若々しい歌声がまるで薫風のごとくながれてきた。駅のざわ
めきが瞬間、呆気にとられて静まった。テノール張りの、よく透き通るすばら
しい歌声だった。(独逸語とおぼしき原語を駆使し、あれだけ研かれた歌唱力を
身につけるには、たとえば発作的ないかれた行為にしろ、余程の習練を積んだに

違いなかった。）

日頃はまったく没交渉の乗客のあいだでさえ、たがいに目で語らい、耳をそばだてている。同時に、奇異の視線が歌声の沸きあがる辺りに熱っぽく注がれていた。

雨合羽の駅員がせかせか歩きを停めて、爪立ちしてじっと凝視していたが、こちら側からでは、歌い手の姿は人混みに見え隠れして、見さだめ難かった。歌声だけが、荒天をかいぐり、晴れ間にきらめく太陽の温もりのように、一人びとりの灰色のまなざしに微笑^{ほほえみ}を点して、優しく、高らかに舞いあがるのであった。

風景

梅雨空のひとつき

たそがれに雨が止んだ

林の中は

曇天をにじませて荒れ放題の茂りよう

ゴミの山が見え隠れする

鶺鴒ひよどりのつがい

枝枝を飛び交いながら

頭ごなしに

だみ声でわめきたてる

鴉も濁音さながら